

若槻禮次郎最後の漢詩「永別」

松江の^{さいかまち}雑賀町出身で島根県初の内閣総理大臣となった若槻^{わかつきれいじろう}禮次郎は、昭和24年(1949)11月20日に83歳で天寿を全うしました。本年は没後75年にあたります。

禮次郎は政治家を引退後、静岡県伊東市の別荘で余生を過ごしました。晩年、自らの人生を振り返り、「永別」と題した漢詩に心境を記しています。

この度のスポット展示では、禮次郎最晩年の辞世の漢詩「永別」の実物を初公開し、関連資料とともに禮次郎を偲びます。



わかつき れいじろう
若槻 禮次郎

〈慶応2年(1866)~昭和24年(1949)〉

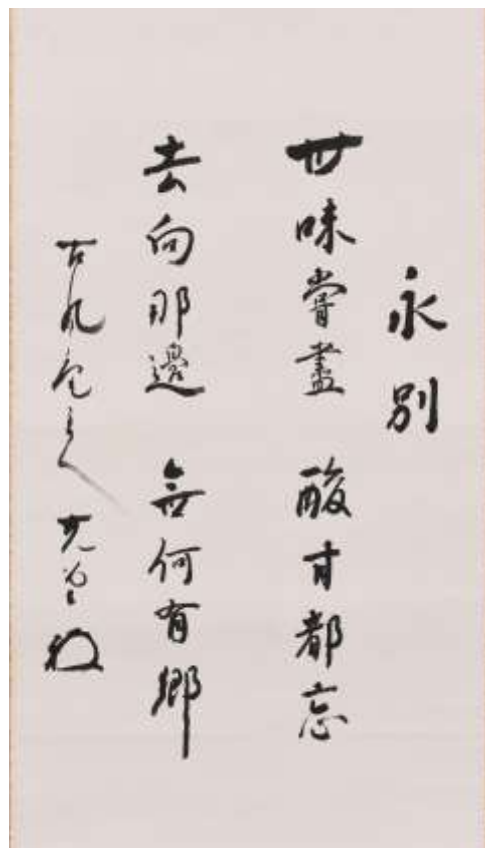
松江藩の足輕身分であった奥村^{おくむらせんさぶろう}仙三郎の次男として、^{さいかまち}雑賀町で生まれる。叔父である若槻^{わかつきけい}敬の養子となり、敬の娘の徳子と結婚して若槻家を継ぐ。

若くから苦学し、敬の援助を受けて上京、帝国大学(東京大学)を卒業。大蔵省に入庁し、大蔵次官を務めたのちに政治家へと転身する。

総理大臣を二度拝命し、大正15年(1926)1月に第一次、昭和6年(1931)4月に第二次内閣を組織した。その後は昭和天皇を^{ほひつ}輔弼する重臣の一人として、一貫して平和主義を貫いた。政界を引退後は、静岡県伊東市の別荘に夫婦で^{かんきよ}閑居した。

永別
世味嘗尽 酸甘都忘
去向那邊 無何有郷
古風庵主人 克堂(花押)

世味嘗^{せいみな}め^な尽^{くし}、酸甘^{さんかん}都^すべて忘^{わす}る、
去^なつて^{へん}那^な邊^{へん}に^む向^かか^{ゆう}わ^んん、無^む何^か有^{ゆう}の^き郷^{きやう}、



わかつきれいじろう
若槻禮次郎が残した最後の漢詩「永別」

禮次郎は亡くなる五日前に自らの人生を振り返り、「永別」と題した漢詩を詠んだ。「この世の味はすべて味わい尽くした、楽しいことも苦しいこともあったけれど、もうみな忘れてしまった、これからどこへ向かうのだろうか、無可有の郷へいくことにしよう」という内容で、戦前・戦中を政治家として生きた人生を思い返している。

なお、文末の「古風庵主人」「克堂」はともに禮次郎の号である。

四言詩「永別」(若槻家所蔵(松江歴史館寄託))

昭和24年11月15日ごろ

弔辞

茲に、謹んで故若槻禮次郎君の靈に告げます。

君は松江市に生れ、明治十五年東京大学卒業、大蔵省に入り、後貴族院議員に勲選せられ、大正元年以来、桂、大隈、加藤の三内閣に入閣し、次々大正十五年憲政会総裁として第一次若槻内閣を組織し、高邁なる識見を以て國政變理の重任を果されたのであります。

昭和四年には倫敦軍縮會議に首席全權委員として殊に、軍縮の難事業の達成に貢献し、更に昭和六年民政黨総裁に推されて内閣宰相の印綬を帯びられたのであります。君が我が憲政の發達の途に奔走せられたる功績は實に大なるものであります。今や我が民主的憲政の基礎を固く固より我國平和回復の日亦遠からずと報せらるる秋、忽然として君の如き偉材を失ふは、邦家の為め眞に痛惜に堪へませぬ。

総理大臣 吉田茂よしだしげるによる別れの言葉

11月23日、東京の護国寺で執り行われた葬儀に際し、当時の内閣総理大臣吉田茂よしだしげるが若槻禮次郎わかつきらいじろうの靈前で述べた弔辞である。禮次郎の業績を振り返り、ロンドン海軍軍縮會議での功績、憲政発展に全力を尽くしたことを述べ、その死は日本国にとって残念でならないと惜しむ。

吉田茂弔辞(若槻家所蔵(松江歴史館寄託))

昭和24年(1949)11月23日

不日、華儀の式に臨み、聊か弔辞を述べ、衷心哀悼の意を表す。次弟であらう、君の眞の心を譽れしん人事を昭和廿四年十一月廿三日

内閣総理大臣吉田 茂



写真で禮次郎れいじろうを振り返る

禮次郎の死の翌月、週刊誌内で組まれた若槻禮次郎わかつきらいじろうの写真特集である。右ページには禮次郎の学生時代や家族とともに写した写真、今回展示している漢詩「永別」が絶筆として紹介されている。左ページには政治家として活躍した頃や東京裁判に証人として出廷した際の姿、晩年や葬儀の様子を掲載する。

アサヒグラフ(館蔵、若槻家旧蔵)

昭和24年(1949)12月7日号